

二

次の文章は、老女による昔語りというスタイルをとる『今鏡』の一節です。よく読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合で改変した箇所があります。(配点比率30%)

雪おもしろく積もりたるおしたに、白河院に御幸などもやあらむと思ひて、ある殿上人の馬ひかせて参り給へりけるに、院「いとおもしろきかな」と仰せられて、御覽せむと思ほし召したりけるに、馬具して参りたりける、いみじく感せさせ給ひて、御隨身の参りたりける一人御供にて、にはかに御幸ありけるに、北山の方さまに渡らせ給ひければ、その御隨身ふと思ひ寄りて、もし小野后の山住みし給ふなどへや渡らせ給はむずらむと思ひて、かの宮にまうでつかうまつる者にや侍ひけむ、「にはかに忍びて御幸の侍る。そなたさまに渡らせ給ふ。もしその御わたりなどへ侍らむずらむ」と告げ聞こえければ、かの入道の宮その御用意ありて、法華堂に三昧僧、経静やかに読ませさせ給ひて、庭の上いささか人の跡踏みなどもせず。打出十具ばかりありける、中より切りて袖二十出ださむ用意ありけるを、「もし入りて御覽することも侍らむ。いと見苦しくや」と女房申しけれど、切りて出だし給ひけるに、すでに渡らせ給ひて、階隠しの中に御車立てて、かくとや侍りけむ。

さやうに侍りける程に、汗衫着たる童二人、一人は銀の鉢子に御酒入れて持て参り、今一人は白金の折敷に黄金の杯据ゑて、大柑子御さかなにて出だし給へりければ、御供の殿上人とりて参りて、いとめづらしき御用意に侍りけり。帰らせ給ひて後、「かしこう内を御覽せで帰らせ給ひぬる」など御達申しければ、「雪見に渡り給ひて入り給ふ人やはある」とそのたまはせける。

さて院より御使ありて、「いと心苦しう思ひやり奉るに、打出などこそ用意して、数多持たせ給へりけれ」とて、美濃国とかや、御荘の券奉らせ給へりければ、参りつかうまつる男女、かれこれ望みけれど、御幸告げ聞こえける隨身に預け給ひけるとぞ聞き侍りし。その舎人の名は信定とかや。殿上人は、某の弁とかや。確かにも聞き侍らざりき。その小野の寺などは、猶残りて、三昧行ふ僧もまだかすかに侍るなり。